

報告

2020年度 中部・関西 合同支部大会報告
(第5回中部支部大会/第6回関西支部大会)

田中 忠芳 A、服部 圭子 B

1 はじめに

Zoom ミーティングを利用して、2021年3月6日(土) 13:00~18:30(日本時間)、グローバル人材育成教育学会(以下、JAGCE) 2020年度中部・関西合同支部大会(第5回中部支部大会/第6回関西支部大会)が開催された。大会テーマとタイムテーブルは、次の通りであった。

大会テーマ：新常态への移行とグローバル人材育成
Transition of Global Human Resource Development for the "New Normal"

13:00 - 13:10 開会の辞

13:10 - 14:50 教育連携部会企画「オンラインお国自慢」

13:10 - 13:15 教育連携部会企画 開会挨拶

13:15 - 14:00 ブレイクアウト セッション

14:00 - 14:25 報告会&質疑応答

14:25 - 14:40 振り返り

14:40 - 14:45 講評

14:50 教育連携部会企画 閉会挨拶

15:00 - 15:20 研究発表(学生発表)

15:20 - 16:00 研究発表(一般発表)

16:10 - 16:50 招待講演

「ニュートンが生きたイングランド—驚異の年、王立協会と論文誌の発明、ペスト禍、ロンドン大火—

並木 雅俊 氏(高千穂大学人間科学部教授)

16:50 - 17:00 閉会の辞

17:00 - 18:30 情報交換・意見交換会

参加者総数は81名で、その内訳は、正会員24名、賛助会員4名、学生会員1名、学部学生25名(スリランカ:18名、日本:5名、カナダ:2名)、高校生17名、中学生7名、非会員3名であった。

開会の辞の後、プログラムに沿って、中部・関西合同支部大会が、オンラインで開催された。

A: 金沢工業大学基礎教育部

B: 近畿大学生物理工学部

2 教育連携部会企画「オンラインお国自慢 We are proud of our whereabouts: Beloved home, school, community and the state」

教育連携部会は、発足以来、様々な形態で学校種の枠を超えた学びを模索してきているが、今回、オンラインで国境を越えてスリランカと日本の若者たちが交流するセッション「オンラインお国自慢」を企画した。

この新しい企画のコーディネイターを、奥山則和氏(JAGCE 教育連携部会部会長/桐蔭学園)と Ananda KUMARA 氏(JAGCE 常任理事・中部支部/名城大学)が務めた。セッションの司会進行を大口真史さん(名城大学外国語学部)が務めた。大口さんは、スクリプトに沿って、英語と日本語で会を進行した。スリランカからの参加者のために、KUMARA氏から、随時、臨機応変に、英語でもアナウンスが行われた。

ブレイクアウトセッションで、中学生・高校生・大学生の参加者、一般の参加者は、次のブレイクアウトルーム①~③に分かれて入室した:

① NAKAMURA, Mizuki

・ Ananda College, Colombo

・ Holy Cross College, Gampaha

・ Toin Gakuen (famous graduates)

・ Toin Gakuen (club activities)

② MATSUDA, Reiya

・ Royal College, Colombo

・ Sirimavo Bandaranaike

・ Toin Gakuen (symphony hall)

・ Toin Gakuen (uniform)

③ ONODERA, Riku

・ Visakha Vidyalaya, Colombo

・ Meiji University High School

・ Toin Gakuen (why JHS going)

・ Toin Gakuen (school festival)

各ルームで、参加者は、事前にグループで制作された地元を紹介するビデオを視聴し、大学生の司会で、

作成の意図やポイント等を質問し合い交流を深めた。各ルームの司会を、①は中村美月さん(名城大学)、②は松田怜那さん(上智大学)、③は小野寺陸さん(成蹊大学)がそれぞれ務め、英語を基調にして、各ルームでセッションが進められた。

各ルームでのブレイクアウトセッション後、参加者はメインセッションに戻り、大口さんの司会進行で報告会&質疑応答が行われた。各ルームの司会から各セッションの報告の後、参加した日本とスリランカの高校生から、感想や文化や習慣についての質疑応答が活発に行われた。一般参加者からも質問があり、参加者の間で、オンラインで、交流が活発に行われた。

振り返りでは、ブレイクアウトセッションの司会をした大学生から、英語を基調とした遠隔でのセッションの司会の難しさや課題が述べられた。その後、スリランカと日本の生徒・学生の間で、英語で、食や文化等について熱心に質疑応答が行われ、今後へ向けた前向きな感想やコメントがあった。お互いに学ぶことも多く、とてもいい交流の機会になったようである。

最後に、高城宏行氏(JAGCE 教育連携部会副部会長/玉川大学)から、講評、閉会の挨拶があった。

3 研究発表

3.1 研究発表(学生発表)

工藤俊郎氏(JAGCE 関西支部/大阪体育大学)の司会で研究発表(学生発表)が進められた。

3.1.1 人類の歴史から学ぶ21世紀のグローバリゼーション

渡邊芽依さん(名城大学外国語学部)と山田明さん(名城大学外国語学部)から、「人類の歴史から学ぶ21世紀のグローバリゼーション(VUCA時代に求められる社会のあり方)」と題して、研究発表が行われた。

発表者らは、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の拡大により従来のグローバルゼーションに終止符が打たれたが、感染症の歴史を今後どう生かすかを考察し、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)、Complexity(複雑性)、Ambiguity(曖昧性)の頭文字をとった造語「VUCA」(ブーカ)で象徴される時代である21世紀における新形態のグローバル社会のあり方を考えると述べた。

その上で、人類が経験した過去の感染症について、時期、原因、社会への影響をわかりやすく表にまとめ、

感染爆発を助長した要因について、過去と現在とを比較した。また、COVID-19の現状が紹介され、それを受けた生活環境の変化が人との「非接触」と深く関係していることを指摘した。そんな中、発表者らは、在日留学生やスリランカ人の学生とオンラインで交流会を行い、簡単に海外と繋がることができたことに驚いたと述べ、従来、常識と考えられてきたことが必ずしも最善とは限らないことを学んだ、と報告した。

18世紀ごろまでの感染防止策「隔離・閉鎖・廃棄」は、現代は「廃棄」が「除菌」に置き換わると考えられるものの、「隔離・閉鎖」は現在も、なお主要な防止策であると述べた。

その一方で、中世・近世と現代との決定的な違いはインターネットの普及であり、現代に生きる私たちは、自分がどう行動すべきか等、個人レベルでの判断能力が求められていることを指摘し、積み上げられた経験と歴史から学ぶこともあるが、自分たちで考えなければならぬことも少なからずあると指摘した。ICT技術の活用は今後ますます重要になり、「分散化」「バーチャル化」により新しいグローバル社会のあり方が浸透するだろうが、文化や習慣で変わらないこともあるだろうと述べた。

最後に、フランスの作家ポール・ヴァレリーの「我々は後退りしながら未来へ入っていく」という言葉を引用し、多くの疫病感染を経験した人類の歴史から学び、世界規模でそれらを参照しながら未来を形成する必要があることを訴えた。

質疑応答では、VUCAの時代のどこに着目しているかについて質問があった。発表者らは、COVID-19拡大やそれに伴うICTの急速な普及をみると、Volatility(変動性)、Uncertainty(不確実性)が現在のパンデミックを象徴していると思うと回答した。また、パンデミック下の学びの質について質問があり、ネットワーク環境が整っていればオンライン動画を復習で繰り返して聴けるので学びの質が向上したと回答した。

3.2 研究発表(一般発表)

糸井重夫氏(JAGCE 中部支部/松本大学)の司会で研究発表(一般発表)が進められた。

3.2.1 Developing Human Resources for the New Normal: Way Foreword

KUMARA, K.K.U. Ananda 氏 (Faculty of Foreign

Studies, Meijo University, Japan) と KUMARA, P.H.T.氏 (Faculty of Management, Uva Wellassa University, Sri Lanka) による発表では、スリランカからオンラインで繋いで、KUMARA, P.H.T.氏が発表した。発表の概要は次の通りである：

パンデミックは、産業部門とサービス部門に大きな悪影響を及ぼしている。世界的に COVID-19 の症例は依然として増加傾向にあり、約 250 万人の死亡を含む 1 億 1500 万人の症例が報告されている (2021 年 2 月 28 日現在)。政府機関、事業体、大学、および学校はオンラインに移行し、飲食物、野菜、薬、その他の注文はオンラインで行われるが、多くの国で地方の周辺地域では 3G / 4G の通信環境が不十分で、一部の地域では通信環境が存在しない。

現実の世界で COVID-19 以前の状況に戻ることは予想できず、状況は新常态「ニューノーマル」に移行している。人材の能力と可能性について分析し、「ニューノーマル」に直面した開発途上国での、国の開発における人的資源開発のための代替戦略を提案する。

調査によると、COVID-19 により、スリランカ等の開発途上国でも在宅勤務が強く推進されているが、経済的、物理的、法的、そして人的資源も、これに備えられていなかったことがわかった。現在、経済活動を行う上で人的資源の管理に苦労している。遠隔地の従業員を長期間管理することは、主要な人事問題になっている。労働者の多くは、上司の直接の監督下で、指定された勤務時間、決められた作業エリアやオフィスで働くように訓練されているが、在宅勤務は、これらすべてで問題を引き起こす。さらに「ニューノーマル」の状況において、労働者は非常にストレスを感じていることがわかる。

この調査では、在宅勤務が「ニューノーマル」の多くの事業体の恒久的な運営モードになると結論付けている。したがって、人的資源をリモートワークに向けて訓練することが必須である。このことに必要なインフラと法的枠組みは、開発途上国において確立される必要がある。また、この調査では、すべての従業員にウェルビーイングトレーニングを提供し、モチベーションに注意を払うための管理スタッフのトレーニング、スタッフとの聞き取りと明確なコミュニケーション、リモートワークに対する前向きな姿勢の浸透、緊急行動としての在宅での良好なワークライフバランスに関

するトレーニングを推奨している。そうすることで、「ニューノーマル」のための人的資源が準備できるとしている。

質疑応答では、学生の渡邊さん (名城大学) から、リモートワークにおけるパフォーマンス低下にどのように対処しているか、英語で質問があった。それに対して KUMARA, P.H.T.氏から、パフォーマンスを上げる工夫、リモートワークやオンラインのメリットについて具体例とともに、英語で回答があった。

3.2.2 宇宙史・地球史とグローバル人材育成に関する一考察

発表者、田中忠芳 (金沢工業大学基礎教育部) は、ジョン・デューイ (米国、1859~1952) が、教育の目的を「自然に従う発達、社会に有為な能力、教養つまり人格的、精神的に豊かにすること」としたこと、職業を「他の人々に対して奉仕をし、いろいろな成果を達成するために個人の能力を使用するようなあらゆる連続的活動」と定義したことに触れた。

また、デューイが「生活は自己更新の過程である」、その営みのための「教育は、まず第1にコミュニケーションによる伝達にある。コミュニケーションとは経験が皆の共有物になるまで経験を分かちあつて行く過程である。コミュニケーションはその過程に参加する双方の当事者の性向を修正する」としたこと、脳科学的にも確認されている学修における対話の重要性をすでに指摘していた、と述べた。

独自に考案した片対数目盛の方眼紙を用いた「宇宙年表」記入用紙を用いて発表者が実践した、宇宙の歴史に自分の歴史を刻むキャリア教育授業の内容を、実際に授業で使ったスライドを用いて紹介した。

グローバルで多文化的な課題を批判的に多様な視点から分析し、自己や他者の知覚や判断、考え方にどのような相違があるかを理解し、人間的な尊厳のために互いに尊敬しながら多様な背景からオープンで適切かつ効果的な他者との相互作用に関わるためには、地球史、生命史、人類史の観点から獲得できる自己肯定感が必要である、また、他に奉仕することを前提に行われるグローバル・コンピテンシー育成において、地球史的、生命史的、人類史的観点から得られる自己肯定感が必要かつ重要である、と述べた。

4 招待講演

並木雅俊氏（高千穂大学人間科学部教授）を招待して、「ニュートンが生きたイングランド—驚異の年、王立協会と論文誌の発明、ペスト禍、ロンドン大火—」と題してご講演いただいた。招待講演の概要は次の通りである：

Isaac Newton (1642~1727) が偉大な創造を成し遂げた1665年8月から1667年4月までの約20カ月間は「驚異の年 (anni mirabilis)」と呼ばれる。Albert Einstein (1879~1955) と同様に、集中して一人で仕上げた作品は完成度が高い。Galileo Galilei (1564~1642) が亡くなった年にNewtonは生まれた。Science (知識) の累積と進歩が可能となった科学革命後期にあたる。イタリア以外で学協会 (academy) が発足したのもNewton誕生の頃である。Francis Bacon (1561~1626) の自然哲学に影響を受けた人たちのサークルが、1662年に王立協会 (The Royal Society of London for Promoting Natural Knowledge) となった。

王立協会の事務総長にHenry Oldenburg (1619頃~1677) が任命され、Oldenburgは1665年に論文誌“Philosophical Transactions”を刊行した。論文誌という新しいメディアは、研究のアイデアと成果の発表を迅速かつ安価で行うことを可能にし、原稿執筆に要する時間、出版社との交渉と多額の出版費の工面等から学者を解放した「発明」であった。これにより、学問社会にpriority (先取権) が確立した。

Newton誕生4か月前の1642年8月、王党派と議会派との内乱が発展して内戦になり議会派が勝利した。1649年1月にOliver Cromwell (1599~1659) が政権を握り、1652年1月に始まった第1次英蘭戦争は、2年後、イギリス優勢のうちに終結した。Cromwellの死後、1660年に王政復古となりCharles II世が国王となった。1665年2月に第2次英蘭戦争が始まり、イングランド各地にペストが大流行した。ペストは、ヨーロッパ世界が誕生した6世紀と十字軍の始まった11世紀にも大流行し、14世紀には「黒死病」と呼ばれ感染地域の人口の4分の3が失われたと推定される。

1666年9月2日、テムズ川沿いから出火し、4日間燃え続け、1万3200戸が焼失した (ロンドン大火)。この大火がペスト感染者低減の一因とする説もある。

1671年12月、Newtonの反射望遠鏡の発明が王立協会に注目され、翌年1月、Newtonは王立協会会員

に選出され、2月にその論文が掲載された。

Newtonは、ウールズソープに約15年間、グランラムに約5年間、ケンブリッジに研究者として約36年間、ロンドンに政治家として約30年間、隠居の地としてケンジントンに約2年間、それぞれ過ごした。数人の理解者はいたが、Newtonは孤高の人であった。

5 情報交換・意見交換会

閉会の辞の後、Ananda KUMARA氏 (JAGCE 常任理事/名城大学) から“Right Time to Create Stronger Linkages with the Rest of the World”と題してスピーチがあった。その後、情報交換、意見交換が、活発に行われた。

6 おわりに

グローバル・コンピテンスは、知識、理解、態度で構成され、人間的尊厳と文化的多様さへの視点が背景にある。グローバルな課題についての知識と理解だけでなく、文化間の垣根を超えた知識と理解が求められ、他文化へのオープンさ、尊敬、グローバルな精神と責任ある態度が重要となる。

新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、新しい常態への移行が始まり、すでに1年が経過した。人類はこれまで、幾度となく危機に遭遇し、それを乗り越えてきた。17世紀から18世紀にかけて人類は、さまざまな苦難とたたかいながら着実に営みを続けた。ルネサンス期から産業革命期までの人類の営みから、私たちは何を学ぶことができるかという思いから、ニュートンが生きたイングランドの当時の状況等について、並木雅俊氏にご講演いただいた。

実行委員会の委員は次の通りであった (五十音順・敬称略)：糸井重夫 (松本大学)、奥山則和 (学校法人桐蔭学園)、工藤俊郎 (大阪体育大学/第6回関西支部大会実行委員長)、KUMARA, Ananda (名城大学/JAGCE 常任理事)、武知薫子 (近畿大学)、田中忠芳 (金沢工業大学/第5回中部支部大会実行委員長/JAGCE 中部支部支部長)、服部圭子 (近畿大学/JAGCE 関西支部支部長)、日高俊夫 (武庫川女子大学)。

予稿集編集にあたり、近畿大学医学部の後藤敏一氏に多大なご協力を頂いた。ここに深く感謝の意を表す次第である。

受付日 2021年3月19日、受理日 2021年3月20日